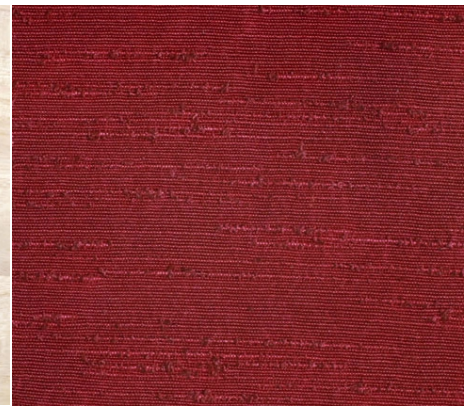
# ちょっとそこまで ～お散歩日和（植物編）～

# ハナズオウ

６号棟と７号棟の間に、はっと目を引く紅紫色の花が枝に沿って群れて咲いています。ハナズオウです。花後に展開するハート形の葉も芽吹き始めており、これもまた愛くるしさを感じさせてくれます。

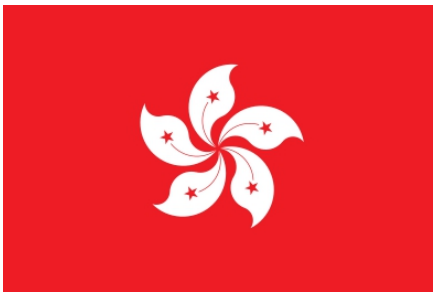
蘇芳（スオウ）とはマメ科の木で、赤色の染色材として広く用いられます。正倉院の御物や源氏物語や今昔物語など、古くからその記述が残っていますので、高貴な色として尊ばれてきたようです。



その後、江戸時代にハナズオウが伝わると、その花色がこの赤の染料に似ているということから名づけられたようです。しかし、素人目には紫というよりも茶色に近いような印象です。この両者は同じマメ科の植物ではありますが、近縁というわけでもありません。

スオウからの脱線になりますが、この木のポルトガル名「パウ・ブラジル（赤い木の意）」から「ブラジル」という国名が生まれています。また、現在の用途として有名なのは染料よりも、バイオリンの弓の材料の方でしょう。ただ、昨年、絶滅の危機にあるとして、産出国ブラジルが象牙並みに商業取引の全面禁止を提案していますから、今後どうなるのか気になるところです。

ところで、この「パウ・ブラジル」の花の形状を見ていて思い出すことがあります。それは、１９９７年の７月に、香港がイギリスから返還された時、新しい香港の旗について紹介した新聞記事についてです。



香港の旗は右のデザインですが、当時の新聞ではこの花をハナズオウとして紹介していました。どう見ても似ていません。不思議で仕方ありませんでした。後に、これは「バウヒニア」と呼ぶ、香港の人々にとっては大変馴染み深い花だと分かるのですが、中国語表記で「紫荊」と書かれていることが間違いの元凶のようです。「紫荊」とは、日本ではハナズオウのことだからです。

それにしても、この花、確かに５枚の花弁とは言え、マメ科の花のつくりとはかけ離れています。そこで、マメ科特有の花のつくりについて触れておきたいと思います。

多くのマメ科の花は左右対称です。しかも蝶のような形をしているため「蝶形花」と呼ばれます。この形の花は、５枚の花弁がありますが、そのうちの１枚が特に大きく上に出ているところが特徴です。これを旗弁（きべん）と呼びます。この旗弁の根元にはマークがあることがほとんどです。このマークは昆虫に蜜のありかを教えるためのもので、「蜜標（みつひょう）」と呼ばれます。

旗弁の下に突き出すようになっているのが翼弁（よくべん）と、舟弁（しゅうべん）です。舟弁は竜骨弁とも呼ばれます。

以上がその基本形ですが、マメ科はバラ科などと並び、非常に大きなグループで、地球上で広く繁栄している一群ですので、それだけ花の形状もバリエーション豊かで、意外なものもその仲間であったりします。いくつか挙げてみますが、その一方、共通点としては鞘状の実を結ぶことでしょう。

（終）